

サッカーがつないだ平和

竹富町立黒島小学校六年 櫻田 有風

皆さんは、「平和」と聞いて何を思い浮かべますか。僕は「誰とでも笑顔で、友達になれること」だと思います。そう思うようになったのは、僕のルーツと、ある大切な経験があったからです。

僕の父は、イスラム教を信仰する外国の出身です。僕の体には二つの国の血が流れています。去年の夏、僕は父の故郷へ短期間の留学をし、そこで文化や宗教が違って、心は一つになれるということを肌で感じました。

まず思い出すことは、初めて登校した日にとっても緊張していた僕に、隣の席の男の子が英語で話し掛けてくれて、すぐくうれしかったことです。何を言っているのかはよくわからなかったけれど、一生けん命に伝えようとしてくれることが分かって、

「友達になれそうだな」

と、すぐに安心できました。

また僕は毎日、お祈りのために日に何度もモスクへ通いました。特に大切な金曜日の礼拝には、正装をして参加しました。慣れない場所に戸惑いましたが、島の人々はみんな

「よく来たね」「えらいね」

と、温かくほめてくれました。宗教という壁を感じるどころか、そのおかげで島の人たちとも心を通わせることができたのです。

そして何より僕たちが仲良くなったのは、放課後のサッカーでした。グラウンドでは、みんながむしろにボールを追いかけてました。そこには、言葉や文化の違いなんて関係ありません。あるのは

「パス!」「ナイス!」

という声掛けと、ゴールした時の最高のハイタッチだけでした。学校

でもモスクでもサッカーグラウンドでも、僕たちはみんな日本と変わらない「友達」でした。

この経験を通して、僕は気づきました。住んでいる場所や信じる神様が違って、何かを大切に思う心や、スポーツを楽しむ喜びはみんな同じだということです。それなのに、今も世界では戦争が続いています。ニュースで流れる戦地の映像を見ると、胸が痛くなります。

壊された街にも、僕が一緒にサッカーをしたような少年たちがいて、将来の夢があったはずです。戦争は、命だけでなくその人の未来も奪いその家族の心までも殺してしまう、本当に悲しいことです。

僕が短期留学中に現地の人たちとすぐに友達になれたように、誰だって相手のことを知れば、きっと「自分と同じなんだ」ということがわかります。同じように笑い、おいしいものを食べて喜び、スマホでゲームやSNSを楽しむ普通の人々だと分かれば、仲良くなれるはずです。世界中の人々が、お互いの違いを認め合って相手を尊重する気持ちを持てれば戦争はなくなると、僕は信じています。

平和は、誰かが作ってくれるものではありません。まずは僕たち一人ひとりが、「隣にいる友達を大切にすること」、そして「遠い国で困っている誰かのことを想像すること」から始めていくべきだと思います。

今でも毎日みんなでサッカーをしたことを思い出します。あんな風に、世界中の子供たちが、笑顔でボールを追いかけること。それが僕の理想とする平和です。僕はこれからも、自分のルーツを大切にしながら、いろいろな人と心を通わせることができる人になりたいです。

ぼくが暮らす竹富町黒島には、「肝びしち、色びしち」という言葉があります。「みんなで心をひとつに力を合わせれば成し遂げられる」という意味です。先人が残してくれたこの言葉のように、世界中の人々が手を取り合って生命を尊ぶ平和な未来を、僕たちの世代で築き上げていきたいです。